●モノグラフ 小学生ナウ

いじめ

VOl.4-2

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智禎・和田京子
東京学芸大学助教授 深谷和子
千葉県総合教育センター所員 中原美恵

目次

特集／いじめ …… 2

調査レポート／いじめ

要　約 …… 8

1.いま、クラスの中で …… 10
- いじわるな子・仲よしの子 …… 10
- 今のクラスのいじめの状況 …… 12

2.いじめられ体験 …… 16
- いじめられ体験をもつ子 …… 16
- どんなふうにいじめられたか …… 19
- いじめた子とそのきっかけ …… 22
- いじめられた時にどうしたか …… 25
- 教師の対応 …… 28

3.いじめられっ子はどのくらいいるか …… 30
- 1、2年生のいじめ …… 32
- 3、4年生のいじめ …… 34
- 5、6年生のいじめ …… 36

4.いじめ解消の手がかりを求めて …… 39
- 教師にどうしてほしいか …… 39
- いじめられやすい子のタイプ …… 41
- いじめをどうしたら …… 43

シリーズ／講座・子ども調査入門②
調査への第一歩 …… 45

資料1　調査票見本 …… 50
資料2　学年・性別集計表 …… 58
資料A　《いじめの内容》自由記述からの抜粋 …… 66

特集

いじめ

東京学芸大学助教授　深谷和子

現代の子ども社会の中にひそむひとつの病理として、「いじめ」が社会的関心を集めている。とくに昨年9月26日から3日間にわたって放映された、NHKおはよう広場の「いじめ」特集は大きな反響をよび、視聴者からの電話が連日鳴りっ放しだったと聞く。その多くはいじめの被害にあった（または現在あっている）母親からのもので、いかにわが子が残酷なしうちを受けたか、しかも多くの担任がそれに対してなぜか冷たく手をこまねいて見ていた、という種類の訴えであったらしい。子どものメンタリティのひずみやゆがみを思わせるような行為がこれほどまでに広がっているのは、現代の社会が子どもたちを健全に育てることに失敗していることの証拠のひとつとも言えそうだ。それだけに、これはわれわれおとなの子育てのあり方に対する警鐘として、多くの人びとにショックを与えたのではなかろうか。

昔もあったいじめ

しかし、「いじめ」の発生は何も今の時代に限ったことではなさそうだ。子どもが本来残酷な動物だということは、よく知られている。浦島太郎の昔から、動物や昆虫に対する「いじめ」は、子どもの性（さが）であったし、人間界でも友だち同士で、徒党を組んで

の弱いものいじめは、別に珍しいことではなかった。いわゆる「いじめっ子」の情報は、昔、たいていの子どもをビビらせるのに十分で、「いじめっ子がいるから、あの道は帰らないほうがいい」という種類の情報は、子ども社会に口こみでよく伝わっていたものであった。

しかしそうした昔の子どもたちの「乱暴」や「いじわる」は、今の時代の「いじめ」とはどこか違って、ある種の「健康さ」「子どもらしさ」をもっていたのではないか、という気もするのだが。

あるエピソード

だが、筆者は自分史の中に、現代の「いじめ」に近い体験を、たった一つだが、明瞭にもっている。戦後すぐの、東京は練馬区の小学校だった。5年生の私のクラスに、「チカマツさん」という女の子がいた。おとなしいがかなりよくできるほうの子だったと思う。そのチカマツさんを、女子のほぼ全員で、イジメたのである。それまで仲よしだったのに、チカマツさんが来たら、パッと逃げてしまおう、遊びの仲間に入れてやらない、という申し合わせがなぜか数日の間に、女の子たちの間にでき上がってしまったのである。

そのきっかけは、全く覚えていない。ただ、大きなきっかけがなかったことだけは、確かだと思う。きっかけがあったとしても大したことではなかっただろう。ただひとつ、三十数年をへた今でも筆者の記憶に明瞭に残っているのは、チカマツさんが、どこかわれわれと違った部分をもっていた女の子で、それが何となく目ざわりで、カンにさわることだった。

チカマツさんはぬけるように色が白くて、バラ色の唇をもっていた。髪はやや赤く、すこしウェーブのある柔らかい毛をしていた。顔全体は、昔の人気キャラクターだったマンガのベティさんそっくりで、目だけがひどく細かった。私たちが何より気に入らなかったのは、チカマツさんの鼻のかっこうだった。鼻柱というのがほとんどなくて……、つまり目と目の間がペシャンコで、途中からちっちゃなかわいい鼻が、ちょこんとつまんだようについていたのである。その色の白さとかわいい鼻は、今考えるととてもキュートなはずだった。しかし、当時私たちには、それが何か「普通でない顔」「私たちと違う子」という感じで、見るたびにイライラさせられたのである。

その気持ちは、なぜか数日の間に急速にふくれ上がり、誰もチカマツさんと遊ばなくなった。そしてその事件のヤマは、ある日「学級会」の時間にやってきた。戦後間もなくのことで、いわゆる民主主義が急速に日本に入ってきていた。各クラスにはお菓子の箱で作ったボール紙の「投書箱」が用意され、一週間にたまった投書を先生が読み上げて、皆で反省したり考えたりする時間が学級会だった。私たちは誰言うとなく、「チカマツさんのことを投書しよう」ということになり、数日の間に私自身も、何十枚となく「チカマツさんは、……」と書いて箱に入れた。学級会の始まる前になって、もう1、2枚を入れようとしたら、ぎゅうぎゅうづめのポストよろしくちいさな紙が入らなかったのだから、子どもたちの執念のほどがうかがえるというものだろう。

学級会が始まった。先生が一枚を開いて読み上げた。むろん「チカマツさんは……」である。次も「チカマツさんは……」その次も……。ところがこのあたりから、私は急におそろしくなった。なにしろあの箱は、皆、「チカマツさんは……」なのである。どこまでいっても「チカマツさんは……」なのである。どうしよう。

ところが、突然先生が、「今日はこのくらいにしましょう」と、読み上げるのを中断して、箱のフタをされたのだ。「よかった。助かった」ただそう思った。先生の次の言葉

は何かとおそるおそる上目づかいに先生を見上げたのだが、先生は何も言われず、箱をしまわれた。それっきりだった。

その後、チカマツさんへのいじめはやんだ。しかし、仲よしに戻るところまではいかなかった。何となくうしろめたい気持ちだけが残り、日ならずしてチカマツさんは転校した。しかし、いじめが原因だったかどうか、今もってわからない。

三十数年をへても、あの「いじめ」は、筆者の中に、あざやかに残っている。あれは、おもしろいゲームだった。それまで経験したことのない、新しいワクワクする遊びだった。加えて、チカマツさんをいじめるという共通の目標をもった仲間との連帯感——。それは、ドッジボールで相手チームをやっつけようとする時の連帯感とは一味違った、充実した感情だった。数日の間私たちはこの新しい遊びに熱中した。あの学級会事件をきっかけに、このゲームはやんだが、その後では、このことをほとんど思いだすこともなかった。相手をかわいそうだとか、この行為が残酷だなどとは、学級会の一瞬を除いてはほとんど感じたこともなかったのである。

ゲームとしてのいじめ

あれから三十数年をへて、私のかかわった「いじめ」を思いだしてみると、もし当時、子どもたちにもう少し「ワル知恵」が備わっていたら、あのいじめはもっと陰湿でエスカレートしたものになっていたにちがいないと思う。さらに、もし当時、他に健康で熱中できる遊びをもっていなかったとしたら、このいじめゲームはもっともっと長く続いていたにちがいない、とも思う。あの当時、私たちの知恵をしぼったせいいっぱいのやり方が、学級会への投書だったとは……。テレビのない時代の子どもたちのやり方は、ひたすら単純で幼稚だったのだ。新しい遊びやゲームを楽しもうとする気持ちは、今も昔も変わらなくても、ゲームをおもしろくする方法を、当時の子どもたちは、知らなかったのである。

とはいっても、このゲーム、子どもの成長にとって（いじめられる側はむろん、いじめる側にとっても）マイナスであることは明白だ。その傷は、一時的に子どもの心の健康を損ねるだけでなく、あとあとまでも心に残る傷となるだろう。とすると、このゲーム、できるだけ止めなければならないのはむろんである。それには、もっとほかの楽しいゲームへと子どもの目を開き、そこへ参加するようにしむけることが大切だろう。また、不幸にしてこのゲームが起こりかけたら、教師や親が適切に対応して、問題がエスカレートしないうちに、収拾すること。すなわち「いじめ」ではなく、まだ「いじわる」の段階にいるうちに、問題の成長を止めてしまうことが大切だろう。

親の調査から

いじめへの適切な対応のしかたを示唆するデータを、１つ示そう。筆者らは58年10月に、千葉県市川市のＡ中学の１年生の母親全員に、小学校時代の「いじめられ体験」について回顧してもらうようアンケート調査を行った。（サンプル数295名。そのうち、いじめられ体験所有者は31ケースで10.5%。男子17名、女子14名）

まず、いじめのあった学年だが、**表１**に示したように、男子は小１と小４がピーク。女子は４、５、６年で、小学校後期がピークになっている。いじめの続いた期間は(表は省略)、２～３か月間が最も多いが、男子の場合は、２年間以上というケースもけっこう多かった。

つぎに、いじめられるようになった原因を**表２**に示したが、意外なことに、「自分の子の中に原因があったから」が、６～７割とダントツに多かった。なぜだろう。それに比べ

表1　いじめのあった学年

(%)

学年 / 性別	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6
男　子	23.5	5.9	11.8	23.5	5.9	14.3
女　子	7.1	7.1	7.1	21.4	28.6	28.6

表2　いじめの原因

(%)

	男子の親	女子の親
自分の子の中に原因	70.6	64.3
相手が悪かった	29.4	50.0
担任の指導力不足 (学級づくりの失敗)	11.8	14.3
流行だから仕方がない	17.6	7.1
子どもの本性だから仕方がない	5.9	—

(複数回答)

表3　いじめの原因
(本人の性格等に関すること)

- ○意志が弱く、いつも泣きねいりしているから
- ○意志をはっきりと相手に説明できない
- ○おとなしすぎる
- ○気が弱い
- ○優柔不断
- ○行動が遅い
- ○おこれなかったから
- ○考えが深く、子どもらしさがない
- ○すぐ泣くから
- ○体力がない
- ○眼鏡をかけていたから
- ○天然パーマで目が大きかったこと

て、「相手の子が悪かった」とする者の割合は（とくに男子の場合）あまりに低すぎないだろうか。しかもその内容は**表3**に示したように、クラス内では、自分の子の性格の弱さが挙げられている。弱ければやられてもしかたがない、とでもいうのだろうか。

つぎに**表4**は、「いじめにあって親たちがどうしたか」である。ここでも意外に、「自分で解決しなさい」と言った親が多く、6～7割に達している。「子どものケンカに親が出るな」とは、昔の親心得の第一条ともいうべきものだったが、それは果たして、現代の「いじめ」にも通用するのだろうか。他には「担任に話す」が多く、また、全体に男子の親が、積極的に行動しているのはおもしろい。女子の親が男子の親より多かったのは、「仲よしの友人に（いじめがやむよう）たのむ」だけである。

表4　両親はどうしたか

(%)

	男子の親	女子の親
担任に話した	41.2	21.4
その子の親に話した	17.6	7.1
その子に直接注意した	11.8	—
子どもに「自分で解決しなさい」と言った	70.6	64.3
仲よしの友人にたのんだ	5.9	14.3

（複数回答）

表5　いじめがとまった理由

(%)

	男子の親	女子の親
担任の指導がよかった	35.3	28.6
親の対応がよかった	23.5	7.1
本人がガマンしたので	23.5	28.6
本人が相手とやりあって	17.6	7.1
友人が援助してくれた	—	14.3
クラスや学校がかわって	17.6	14.3

さて、紆余曲折をへて、ある日「いじめ」が終わる。それが終わった理由は何か。親たちの考える理由は、表5の通りである。

まず、表4で見たような「自分で解決しなさい」式の方策はどうか。これは意外に効を奏していない。「本人がガマンしたので」は、男子23.5%、女子28.6%。「本人が相手とやりあって」は、同じく17.6%、7.1%。いずれも思ったほど効果を上げていない。やはり、第1位の「担任の指導がよかった」の、男子35.3%、女子28.6%の数字を評価しなくてはならないだろう。

担任に望みたいこと

学級内にいじめが発生した時、または発生しつつある時に、何よりも問われるのは担任の指導力であることは、これらのデータからも明らかだろう。本当は、いじめが発生した時に、それを察知できるだけの子どもたちとの接触を望みたいところだが、それがやむをえずできないとしても、当事者である子どもやその親から、相談をもちかけられないような担任では、困るのではないか。

子どもや親が多くの場合「いじめ」を担任に訴えないのは、訴えても①担任がとり合ってくれない、か、または、②不適切な対応しかできないので、たぶん問題が解決されないばかりか、時には悪化するのではないか、との懸念からのものであろう。このことをしっかり心に留めておいてほしい。事実、担任に訴えても、①や②の帰結となるケースはしばしばだと聞く。中でも、①のとり合わない担任はまだしも、②の不適切な対応しかできない担任が、意外に多いのではなかろうか。相談された場合に、多くの担任のとる処置は、①学級会を開いて、いじめがわるいことを話し合う、②いじめグループ（またはそのリーダー）をよんで、「いじめをやめるよう」注意する、のいずれかが多いようだが、この2つは、まれに成功する場合があっても、たいていは問題の解決をもたらさないと思われる。

こうした場合に何よりも必要なのは、担任が、①本人に心理的支持を与える、②他の魅力あるゲームへ、グループの注意を移させる、③グループを解体させる、のいずれかではなかろうか。もっとも、あらゆる場合に、まず①は基本的に必要で、ついで、②か③の作戦をたてることが必要なのかもしれない。しかし、いずれにせよ、これは集団の力学を熟知し、これに働きかけるやり方であって、犯人をただつかまえてお説教すればよい、というものではなさそうだ。とにかく子どもたちにとっては、せっかく新しく見つけた、ゾクゾクするようなゲームなのだから、それに飽きるか、他に楽しみを見つけるまで、ちょっとやそっとのお説教では、手放せるものではないのだろう。

人生にはいろいろな楽しみ方がある。おとなの場合、ストレス解消のしかたも、もっと積極的な生活のエンジョイのしかたも、その種類はさまざまだ。子どもの場合も、事情は同じだろう。いじめのような不健康で危険なゲームでなく、もっと子どもらしい遊びの楽しみの見いだせる社会を用意してやることこそが大切なのではなかろうか。

調査レポート／いじめ

千葉県総合教育センター所員　中原美恵
東京学芸大学助教授　深谷和子

要約

① いじめが起きているクラス

現在多少ともいじめが起きているクラスは、4年生で6割、5年、6年で5割である。ただし低年齢のいじめは、いじめというより、子どもらしいイジワルやケンカを、子どもたち自身のひ弱さから、いじめととっている場合も含まれているようだ（図3、図4、図5、図6）。

② いじめの期間

低年齢のいじめは、持続期間も短いが、学年が進むと長期化し、いじめに参加する人数も増え、逆に対象は1人にしぼられる傾向がある（図3、図4、図5、図6、図7）。

③ いじめの相手

男子はいつも男子からいじめられるが、女子は、低学年では男子からも女子からもいじめられ、しだいに同性のみからのいじめに移っていく（図10）。

④ いじめのきっかけ

全体の74%の子は、「何も理由がなくてとつぜんいじめられるようになった」と答えている(図11)。

⑤ いじめられていることを話したか

女子は男子よりはるかにいじめられていることをうち明ける。男子は4年生では女子と同じくらい、だれか（仲のよい友人・両親・先生）に話しているが、学年を追うに従って、だれにもうち明けなくなる（図13）。

⑥ 教師の対応

いじめについて「何もしてくれなかった」先生は38%。「自分で解決しなさいととりあわなかった」先生は8%にのぼる（図16）。

サンプル数　（人）

学年／性	男子	女子	計
4年	360	347	707
5年	368	339	707
6年	359	350	709
計	1,087	1,036	2,123

調査概要

対象●東京・千葉の小学校4・5・6年生
計2,123名
期間●昭和58年12月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. いま、クラスの中で

いじわるな子・仲よしの子

子どもたちが、学校で過ごす時間は、1日に6、7時間。数えてみれば(睡眠時間を除いた)1日の半分近くにもなる。このけっこう長い時間のほとんどが、クラスの中で過ごされることを考えれば、クラスがすべての子どもにとって、何よりも安全で安心のできる場でなければならないのは、むろんだろう。子どもの世界にちいさなトラブルや争いはつきものだが、学級経営がうまくいっていて、クラスがすべての子どもの安全基地になっていれば、そこで起こるちいさなケンカやもめ事は、むしろ子どもの成長に必要な体験となるだろう。しかし最近では、学級経営がむずかしい状況が増加したためか、いじめが日常化する傾向にあり、クラスは子どもたちにとって、必ずしも安全を保障された場ではなくなっているとも言われる。

しかし最近しきりにとりあげられるいじめと、昔からあった子どもの世界のけんかやいじわるとは、いったいどこで線を引いたらいいのだろう。けんかやいじわるは、子どもの成長に必要な体験、つまりカクテルに落とす一滴のビターのようなものと考えることもできるが、いじめはむしろ子どもの成長を損なう役割しかもたない危険な因子であることはたしかである。しかし、見かけは両者とも、かなり似かよっている。

ここではけんかやいじわるを、子どもらしい、「短期間で終わってしまうトラブル」とし、いじめを「長期間にわたって、くりかえししつこく行われるいじわる」ということにしよう。子ども用の質問紙にも、一応その区別をして

おいた。

さて、まずふつうのけんかやいじわるを、子どもたちはどのくらい体験しているのだろう。図1は「いじわるする子」という表現を用いて、その数を聞いてみたものだ。図が示すように、いまクラス内にいじわるする相手がいると答えている子どもは、全体の半数近くもいることがわかる。しかし図でわかるように、1人以上いる、と答えている子どもは学年を追うに従って減ってくる。これは子どもの成長を示す数字であろう。しかし、世の中は、いじわるな子どもばかりではないようだ。図2に示したように、「仲よしの子」だって、ちゃんといるのである。多くの子どもにとって、敵もいるが、味方だってその何倍かはいる、というのが自分のクラスなのだろ

図1・あなたにいじわるする子は…

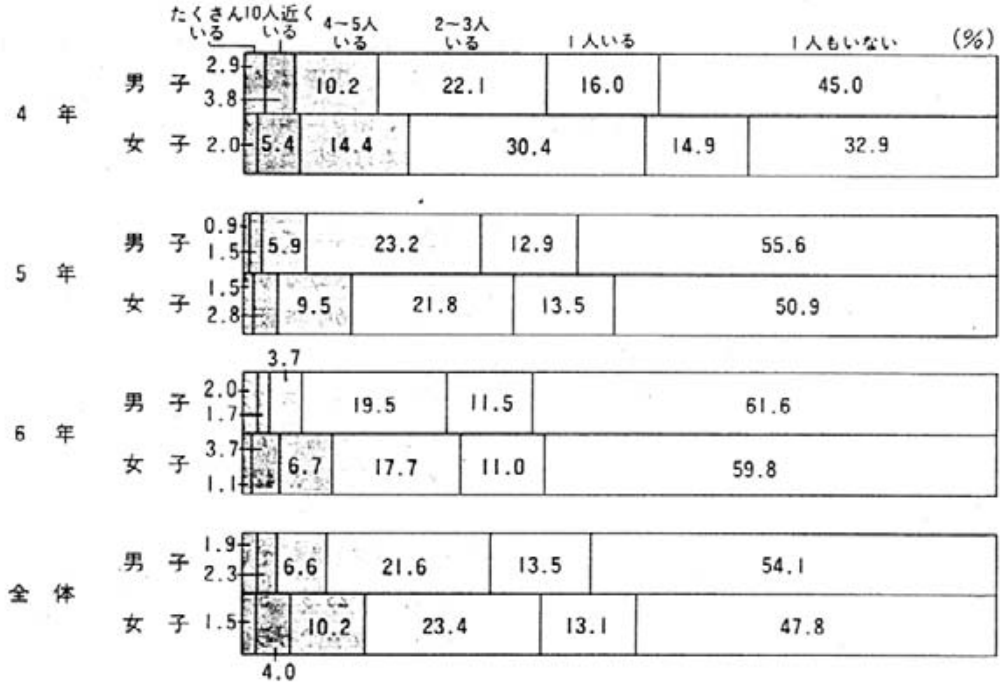
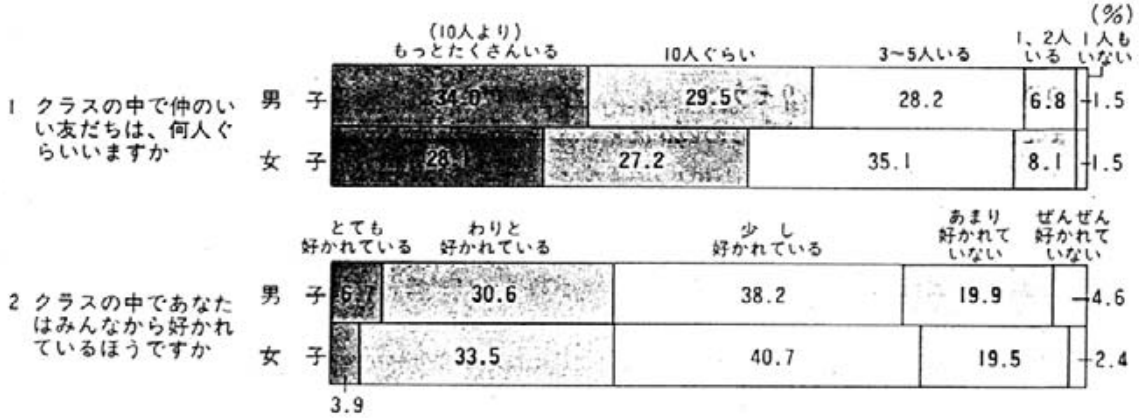


図2・クラス内の人間関係



う。しかし中には、ごくわずかだが、「仲よしが1人もいない」と答える子どもがクラスに1人くらいはいるようすなのである。その存在がちょっと気にかかる。

また図2の2だが、「あなたはクラスのみんなから好かれているほうですか」の問いに対して、やはり2割くらいの子どもが「あまり・ぜんぜん好かれていない」と答えている。この数字も気になるところである。

今のクラスのいじめの状況

さて、そろそろ「いじめ」に入っていこう。まず、今のクラスの中での「いじめられっ子」の存在を、子どもたちにたずねてみたのが、図3～図5である。これは、「いまクラスの中で、いつもいじめられている子がいますか」とたずねてみた結果である。

学年別に見てみると、まず4年生（図3）では、クラス内に「いじめられっ子」がいる割合はほぼ6割。人数は「1人いる」が最も多く、女子がわずかに男子より多い。さて、いじめている側は、その4分の1が「クラスのほとんど全部の子」だし、さらに4分の1が「男子のほとんど全部」で、大きな集団によるいじめがほぼ半分ということになる。次に、それがどんなやり方で、いじめているかを図の4項目について見てみよう。「悪口をいわれる、からかわれる」が84%とほとんどのケースでみられるほか、「ぶたれたり、けられたり」と暴力をふるわれている子どもたちが6割。「無視、仲間はずれ」というむごいやり方も同じくらいある。しかし期間的には、1～2週間で終わってしまったものが35%、1カ月以内を合わせるとほぼ半数となり、一口にいじめといってもそれぞれのケースでその深刻さに大きな差がありそうだ。

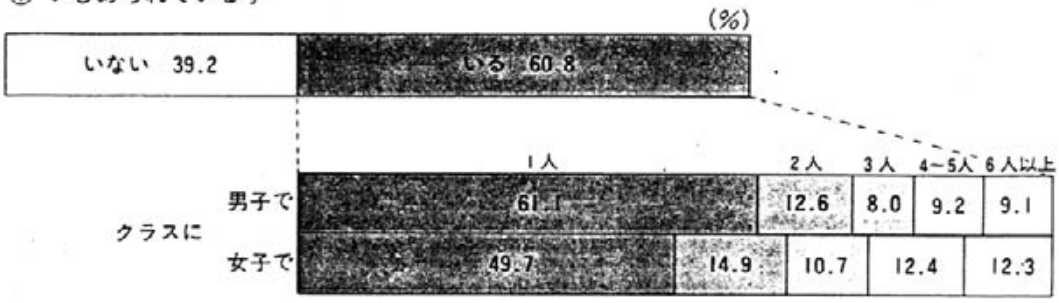
また、「先生は、多少ともいじめの状況を把握しているだろう」とする子どもは64%。教室の中で起こっているいじめは、けっこう担任の目に入っているはずと考えている子どもが多い。実際はどうなのだろう。

図4、図5に掲げたように、5、6年生のデータもほぼ似たような結果だが、いじめの件数そのものは、4年生の61%が、5年生では52%、6年生で同じく52%と、4年から5年にかけて、かなり減っている。しかし逆にいじめる側が、集団化する傾向が見られる。たとえば6年生の場合、いじめられている子どものいるクラス52%のうち、1人が対象になっている場合が7割。いじめる側の人数も「クラス全部」が42%という割合になってきている。それ以前の学年では、4年生の場合、1人が被害にあっているのが5割強で、「全部から」が23%、5年生では同じく5割で23%という数字である。

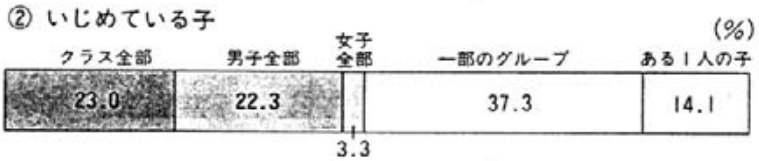
またいじめの方法も、学年を追うに従って暴力的ないじめの頻度はやや減少し、「無視される、仲間はずれにされる」といった集団からの疎外の割合が高くなっていく。さらに、いじめの期間も長期化する傾向にあり、学年を追って、容易には解消されなくなる状況がうかがえる。

図3・現在のクラスのいじめの状況《4年生》

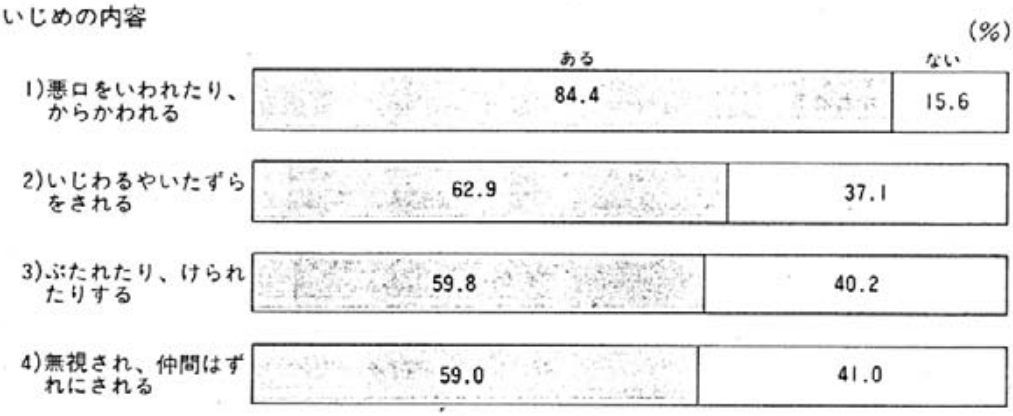
① いじめられている子



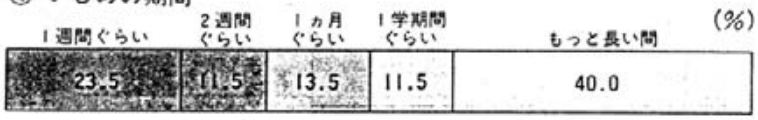
② いじめている子



③ いじめの内容



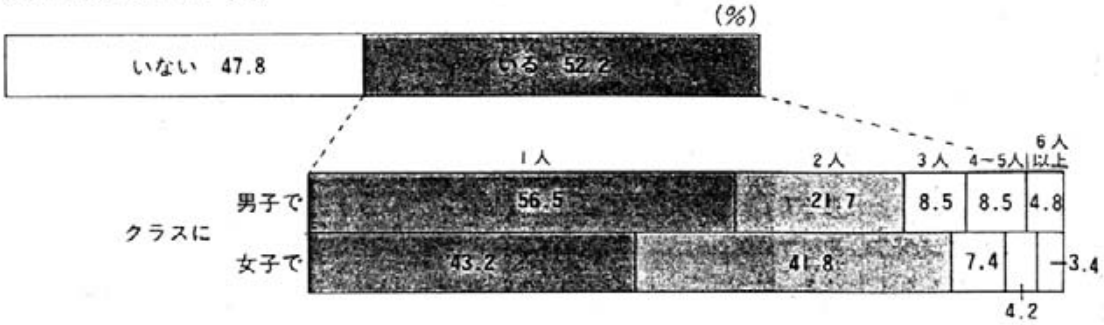
④ いじめの期間



⑤ 先生は、知っているか

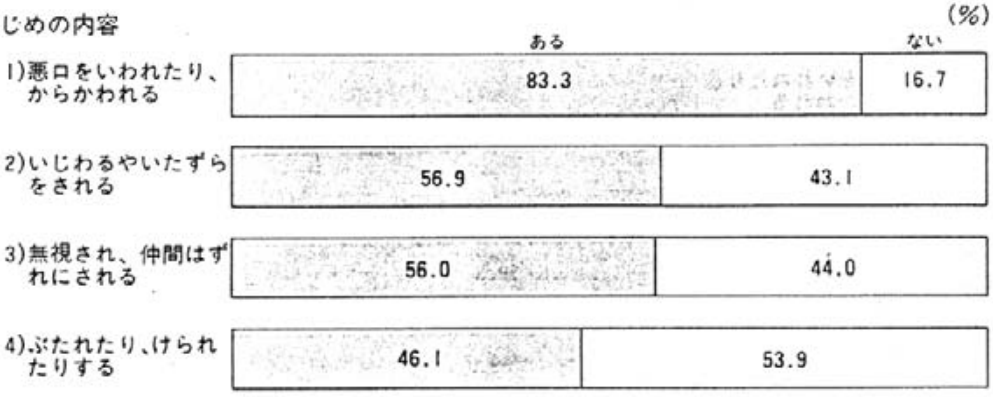
図4・現在のクラスのいじめの状況《5年生》

① いじめられている子

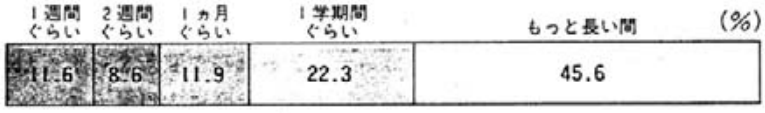


② いじめている子

③ いじめの内容



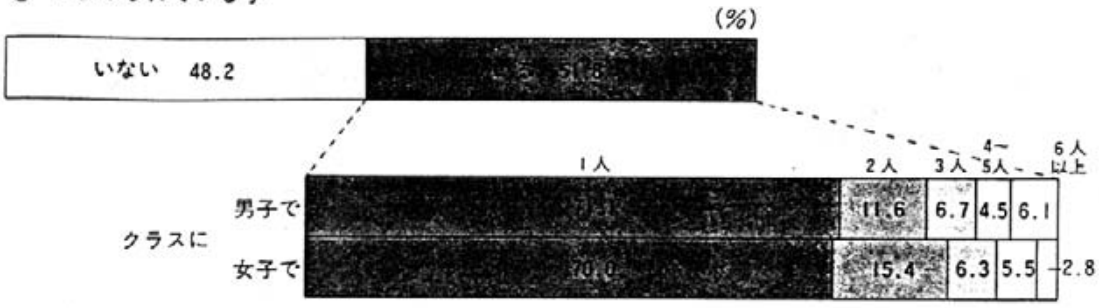
④ いじめの期間



⑤ 先生は、知っているか

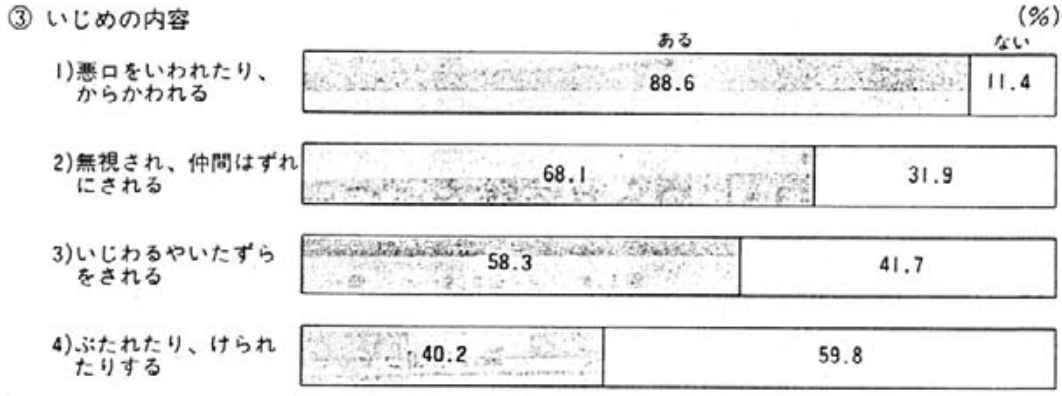
図5・現在のクラスのいじめの状況《6年生》

① いじめられている子

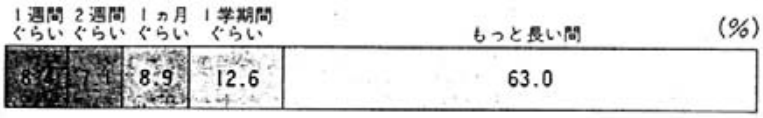


② いじめている子

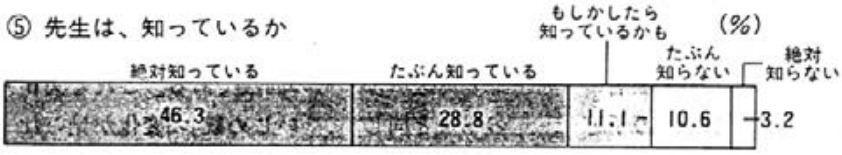
③ いじめの内容



④ いじめの期間



⑤ 先生は、知っているか



2. いじめられ体験

いじめられ体験をもつ子

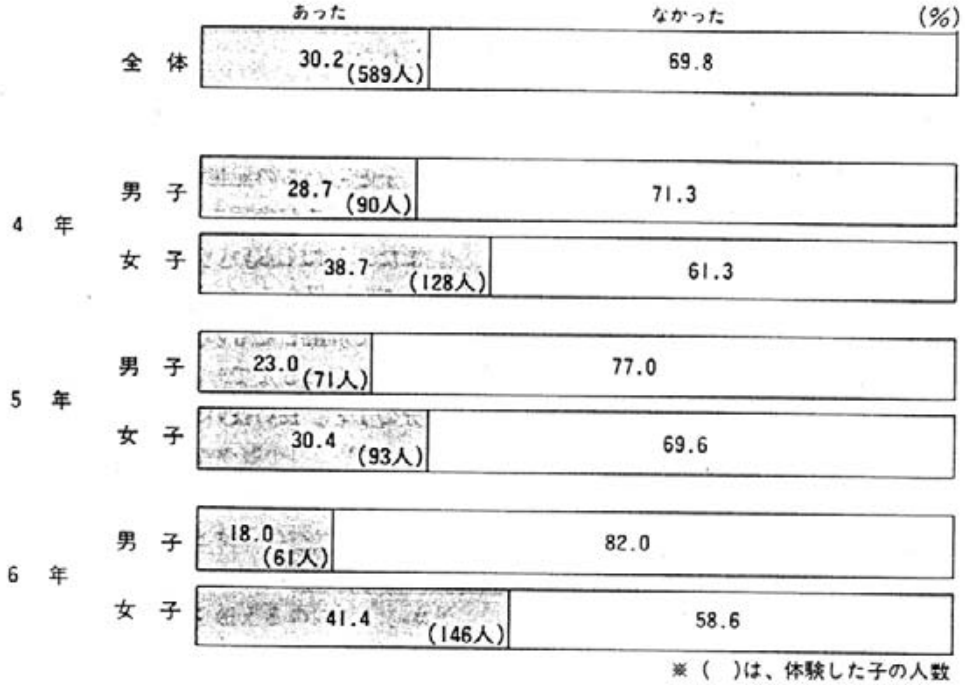
現在のクラスについてたずねてみると、半分ぐらいのクラスには、「いじめ」が起こっているらしいようすを見てきた。

次に、子どもたち自身が過去にどんな「いじめられ体験」をもっているのかをまとめてみよう。

クラス内での経験として、同じ相手から長期にわたっていじめられた体験をもつ子どもは、図6に示したように、全体の30%もいる。図6の(　)内の数値は、それぞれの体験者の人数を示したものだが、全体で589人の子どもが「いじめられ体験」をもっている。男女別にみると、女子に多く、また男子におもしろいのは、4、5、6年と学年がすすむにつれて、逆にいじめられ体験をもっていると答える子どもの割合が減ってくることだ。これは常識では考えられないこと（加齢と共に体験は増加しても、減少することはない）だが、これは何をいじめとみなすか、判断の基準が変わってくるからなのだろう。つまり年齢が低いと、ちょっとのいじわるでもいじめととり、それが後には「あの程度のことならいじめには入らない」とみなすだけの自我の成長が生ずるのだろう。これがとくに男子に見られるのも、おもしろい。

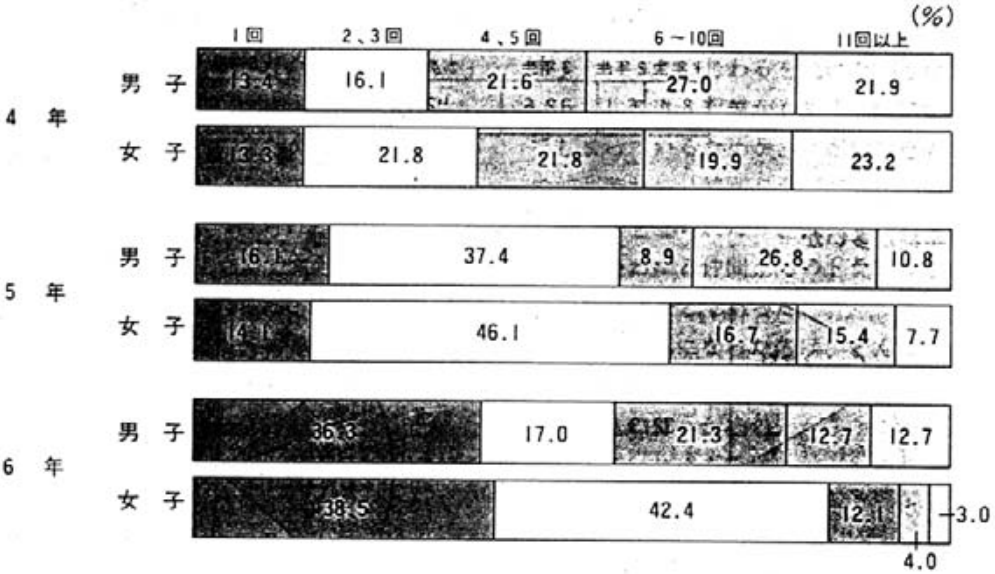
さて図7は、その回数である。これも図6の場合と同じく、「いじめ観」の変化が見られる。学年が下なほど、回数が多く訴えられている。つまり、ちょっとしたケンカやいやがらせもいじめととられているのが、成長と共にいじめには分類されなくなるようすが見いだされる。しかし気になるのは、体験者のう

図6・自分がいじめられた体験



※（　）は、体験した子の人数

図7・いじめられた回数(体験者のうち)



ち1回というのは6年生でも3分の1。他は2、3回以上をくり返し体験していることだ。いじめられやすい子がいて、その子は大、小何回となくくり返し被害にあっているようすがうかがえる。

彼らのいじめられ体験がいつごろ起こったものなのか、学年別にまとめてみたものが次の図8である。いじめが何回かくり返された時は、最近の分について答えてもらったので、この図の見方はむずかしい部分があるが、少なくとも「今の学年になって」経験している子どもの割合は、4年生44%、5年生34%、6年生23%と、しだいに減っていることは確かである。しかし前に指摘したように、いじめのとらえ方が、学年によって少しずつ変化しているので、この図から単純に上学年になるといじめが減る、と言い切ることはできないだろう。むしろいじわるからいじめへ、という推移が見られるといったほうが、適切かもしれない。

次に図8の2だが、いじめの発生しやすい学期は、一般に5～6月ごろと言われているが、子どもたちの記憶の限りでは「2学期に」というケースが半数を占めている。

また、どれくらいいじめが続いたかは、ケースごとに異なるが、図にあるように、1～2週間で解消したものが3分の1、他方では「学年が変わるまで～もっと続いた」場合も3分の1と、長い長いいじめも見いだされる。

図8・いじめにあった時期

1.何年生のときか

(%)

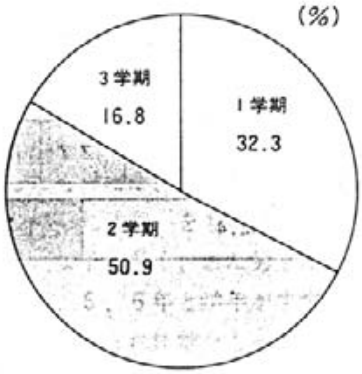
	1年生のとき	2年生のとき	3年生のとき	4年生になって
4年	8.4	18.9	28.6	44.1

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生になって
5年	9.1	14.3	10.3	32.0	34.3

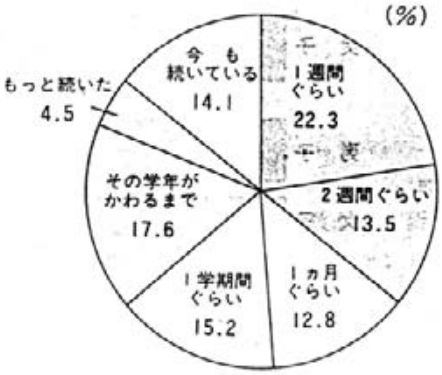
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生になって
6年	8.4	6.1	12.6	22.9	26.6	23.4

※何回かあった場合は、最近のいじめについての回答

2.何学期が多いか



3.いじめの期間



どんなふうにいじめられたか

さていじめられ方は、学年によってどう変わるだろうか。図9に見いだされるように、学年によって、少しずつやり方が変化している。4年の男子では、「悪口」「いじわる」「ぶたれる」の3項目ともほぼ同程度の割合で、ほぼ3分の2のケースにみられる。が、発達的には「ぶたれる、けられる」といった暴力的ないじめが他学年とくらべ高い割合を示しているのが特徴的である。5年生になると暴力的ないじめがやや減少し、「無視されたり、仲間はずれにされる」の頻度が高くなる。6年では、男子と女子のいじめられ方の差が大きく、男子は「ぶたれる、けられる」の割合が54%と半数を超えるのに対し、女子では13%ほどで、むしろ無視や仲間はずれの形のいじめが起こりはじめる。

いじめられ方のこうした発達的な変化について、いじめられた当時の学年ごとにいくつか自由記述の中から拾い出して、少し具体的に見てみよう。（巻末資料Aを参照）

1年生では、「髪をひっぱられたり、つねられたりした」「ひっかかれた」「ぼうでぶたれた」などの幼くて個人的ないじめ、2年生になると、「掃除道具でたたかれたり、いない間にゴキブリの死がいをイスの上におかれた」「遠くから石をぶつけられた」「とにかくやることなすこと泣くまで文句をいったりした」「休んだのを責められ、バカとか悪口を言われた」など、グループでのいじめがいくつか出てくる。

3年生では、「荷物を全部もたされる」「命令されて従わないと暴力をふるった」、「ぼくが遊びに入れてといったら、おまえなんか入れたくないと言った」など暴君的ないじめの他に、「失敗するとくり返しみんなの前で大声ではやす」「髪を切ったらそのことでからかわれた」などの男子グループのはでなからかいが見いだされる。

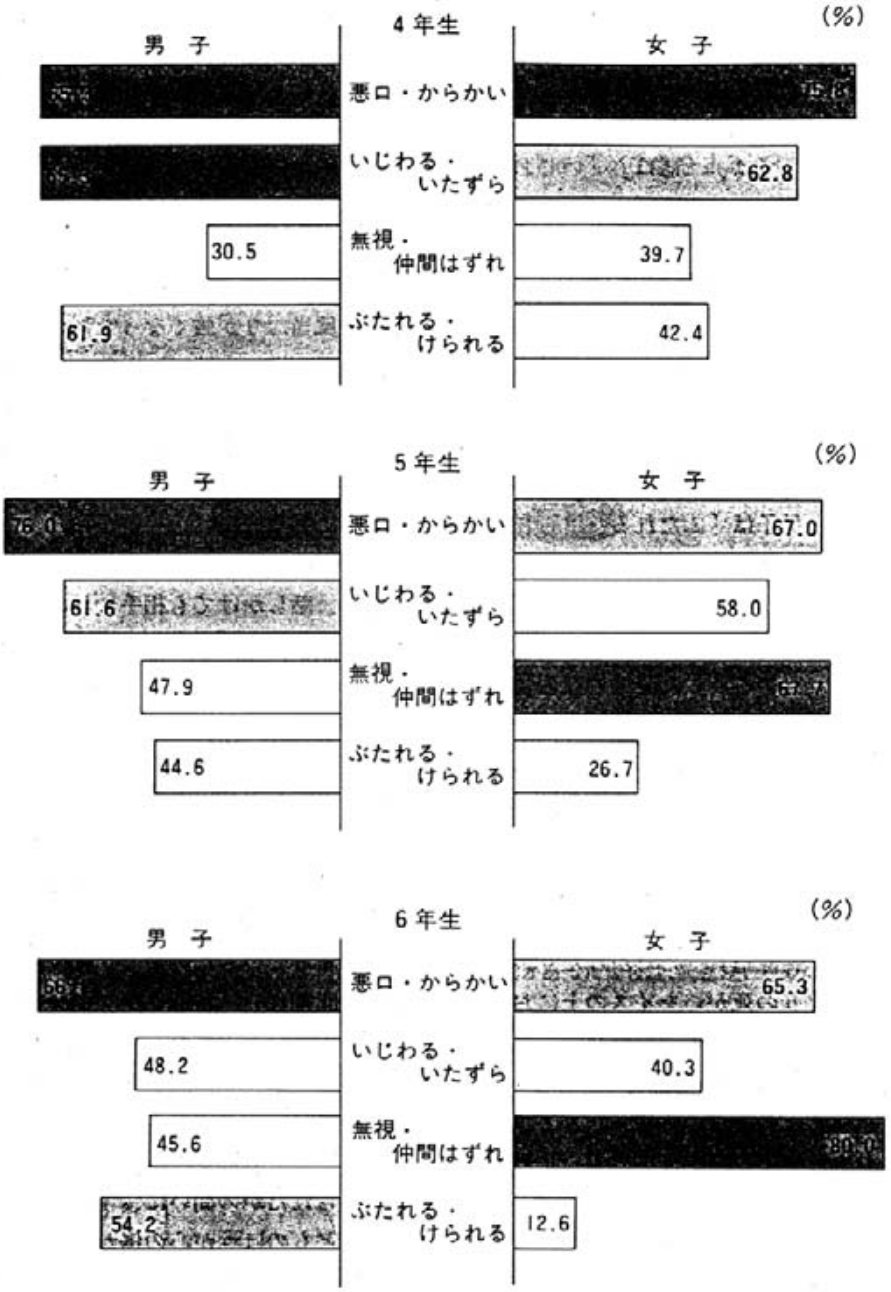
4年生になると、「ラケット野球やリレーで負けると、お前のせいだと責められる」「班長のクセに何だよ、といちいち反発される」などグループの足をひっぱる子や、リーダーへの風当たりが強くなった形のいじめで、男子から女子に向けられるケースや、女子同士では「1カ月以上も口をきいてくれない」「そばによると『いやだねえ』と言われる」などの仲間からはずすタイプのいじめもみられるようになる。

5年生では、主に「遊びには入れてくれないし、話しかけても相手にしてもらえない」「お前がいるとしらけるとか考え方が幼いとかいって班から抜けさせようとする」など、集団で1人を無視したり、あからさまに仲間はずれにするようすが多く登場してくる。女子のグループが、ある女の子を「一斉ににらんだり、いたずら電話をかける、クツをかくす」といったいじわるを続けた例も出てくる。

6年生では、記述が女子のものにかたよってしまっているためか、「転校生をめぐっての仲間割れ」、「特別クラブでメンバーから嫌われ、物をとられたり、無視されたり」といった、いわゆる仲間うちのトラブルをのべたものがほとんどであった。

しかし、気になったのは、どんなふうにいじめられたかの問いに、すらすらと答えられる子どものほうが心の傷が浅いのか、長期にわたっていじめを受けた子どものほとんどはノーコメントだったことである。そうした意味では、残念ながら、今ひとつ子どもたちの心のうちをつかみきれなかった感もある。

図9・どんなふうにいじめられたか



自 由 記 述 例

そうじの時間 そうじの道具ごたたかれたり、私がいない間ゴキブリのしがいをいすの上においたり、ボールをつよくあてたり遠くから石をぶつけられたりしました。

小2(女子)

となりの席になるといじめる人が悪口を言ってこぶたりけったりかつの手をひっかいたりしました。でもその反たいにそのいじめっこがいじめられていた子全員にむしされてそのこがなかまはずれにされた。

小4(男子)

その子はクラスほとんどの子にいじめられ、その子にいじめなかったのは僕とある1人の友人ぐらいで、みんな「おやのしねばいい」とか言っていた。それから○○さんと言うのがあって(○○の中にはいじめられたこの名がくる)みんなつけおっていた。そうじの時は、その子のつくえをはこぶのいやがってその子のつくえは、いつも僕がはこんだ。

小4(男子)

悪口をいったり、ぶたれたり、からかわれたり、なかまはずれにしたり、よりつかなかったり、その子の使用した物(水筒のじゃロなど)だけを使わなかったりした。

小5(女子)

相談にのってくれて、自分の欠点などを直したりして、思い切ってあそびに入ってごらんといってくれたりしてくれた。

先生の対応

私はふとってて体もあまりけんこうでなくてよくはたりしてたからだと思う

いじめのきっかけ

いじめた子とそのきっかけ

次に、いじめる側にまわった子どもについてたずねてみた結果が図10である。まず、何人ぐらいからいじめられたかでは、1人か2人からが4割、3人～4、5人のグループからが4割。しかし、11人以上の大きな集団からいじめられた子も8％ほどいる。

いじめた子どもの性別を学年・男女別に図示してみると、男子のいじめられ体験は、ほとんど男子から。また、女子のいじめられ体験は学年が下の場合は男子からも多いが、しだいに同性同士のトラブルが増えて、6年生ではほとんどが同性からのものになる。

また、いじめられた子といじめた子との関係も、学年・性別によってやや違いがみられる。図のように、4年生では、前から仲の悪かった子どもからいじめられるケースが男子、女子とも多いのだが、その後女子では逆に「仲よし」からいじめられるケースが増えていき、6年生では逆転する。愛憎半ばするというたとえがあるが、女子のほうが感情が激しいのだろう。これに対して男子はいつも、仲の悪かった子どもからいじめられるケースが多い。

しかし、いじめられるようになったきっかけについて、子どもたちの多くははっきりつかんでいない。図11を見ると「何も理由がないのに突然に」と答えている子どもが全体の4分の3にものぼる。ただし、何らかのトラブルが引きがねになっているケースの具体例としては、

○宿題の算数ノートを見せてあげなかったから
○いじめられる子の味方をしていたから
○私が相手の子のいうことをきかないから
○私が自分勝手で、きげんの悪い日に友だちにやつあたりしたから
○かげで悪口を言ったのをある人がその人に伝えてしまったから
○その人の好きな人と交換日記をやり始めたから

のようなものがある。しかし、きっかけといっても、実に（大人の側からすれば）たわいのない内容だ。

しかし図12に示したように、いじめの持続期間と「きっかけの有無」「それ以前の友人関係」は多少の関連があって、前から仲よしだった子や、きっかけがあってのトラブルは、1～2週間で終わってしまうことが多いのに対し、いじめの名に価するような長期間のものは、前から仲が悪い子との間で、しかも何もきっかけがない（かのように思える）場合に多いようである。

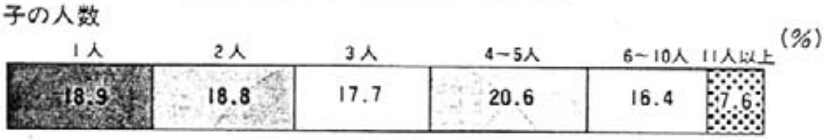
いじめられた子に、「あなたはどんなところが悪くていじめられるようになったと思うか」とたずねてみると、

○私が不潔だったり、おしゃべりが多かったから
○転校してきた時、いい子ぶっていたから
○ぼくがケンカが弱くて、気も弱かったから
○おとなしくて、遊べるか遊べないかはっきりしなかったから
○気が弱くて、泣き虫だったから
○私は太っていて、体もあまり健康でなく、よく吐いたりしたから
○転校したばかりの時、もじもじしていたから
○相手に何か気にくわないところがあったらしい

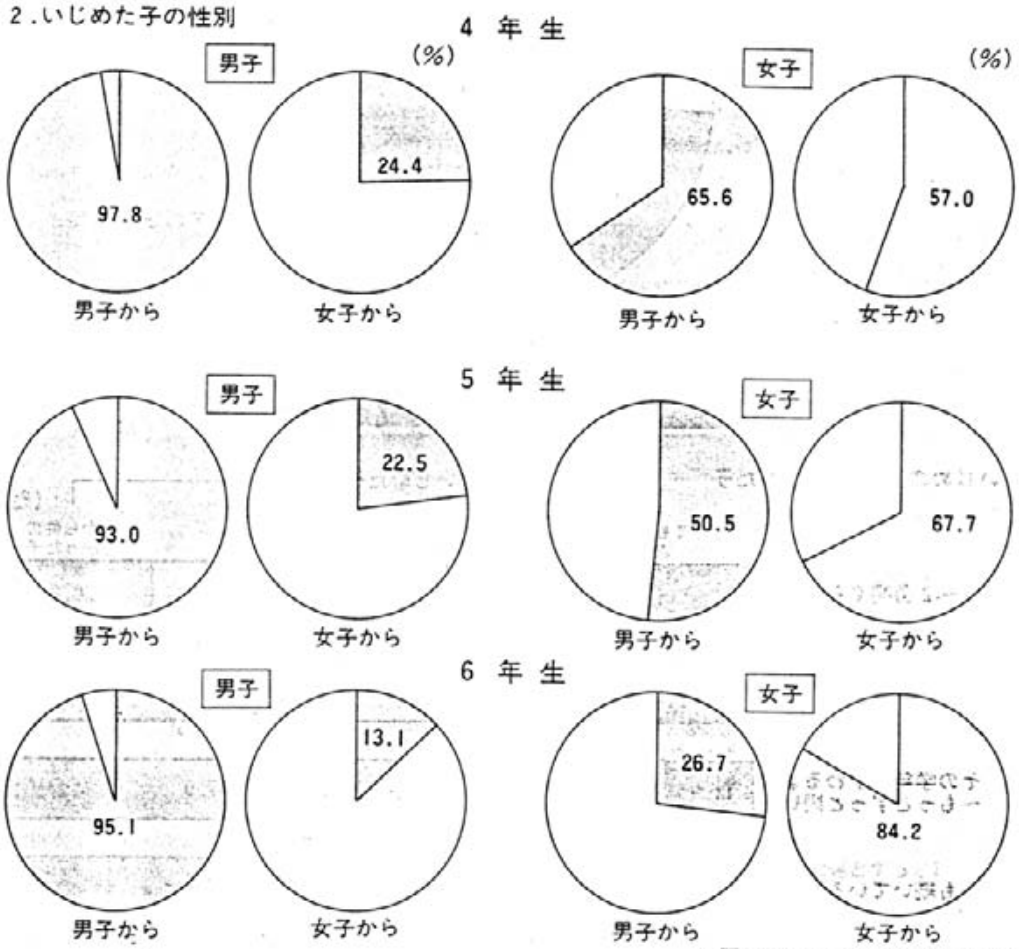
など、不潔、気が弱い、はっきりしない、太っている、転校生、いい子ぶる子……と子ども集団の中で異分子とみなされやすい子どものタイプが浮かび上がる。しかしこれではいじめ解消の対策はたてにくい。子どもたちが、いじめられている間をどうやって切りぬけ、何が彼らの救いになったのかに目を向けてみよう。

図10・いじめた子について

1.いじめた子の人数



2.いじめた子の性別



※両性からの場合もそれぞれに含む。

3.いじめた子とのそれまでの関係

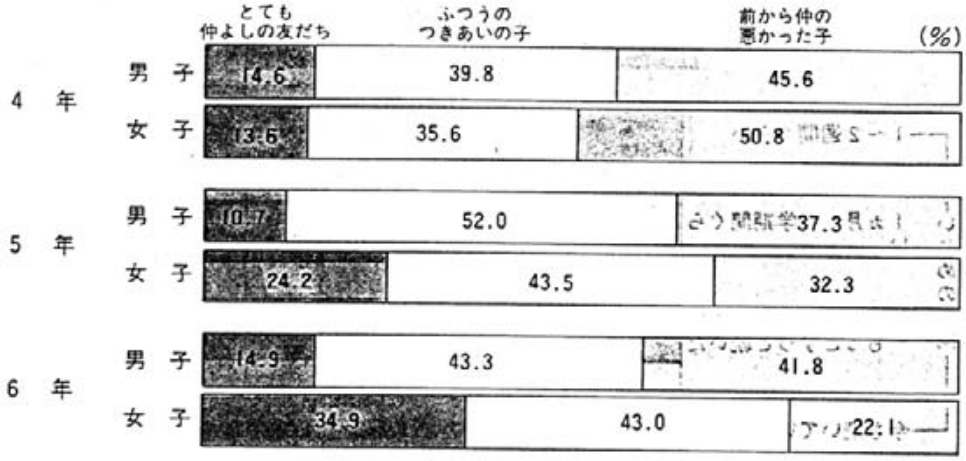


図11・いじめのきっかけ

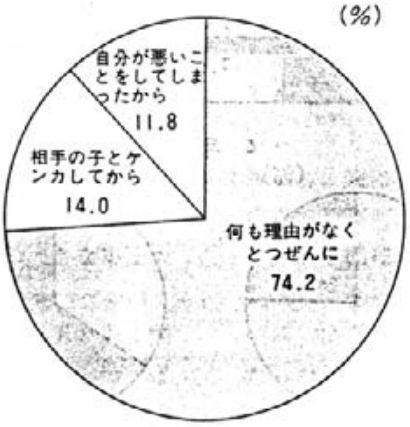
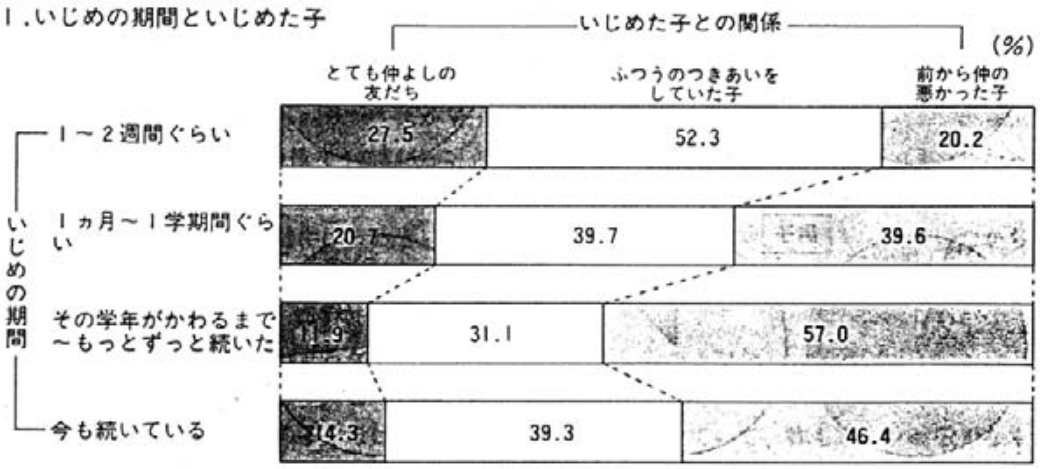
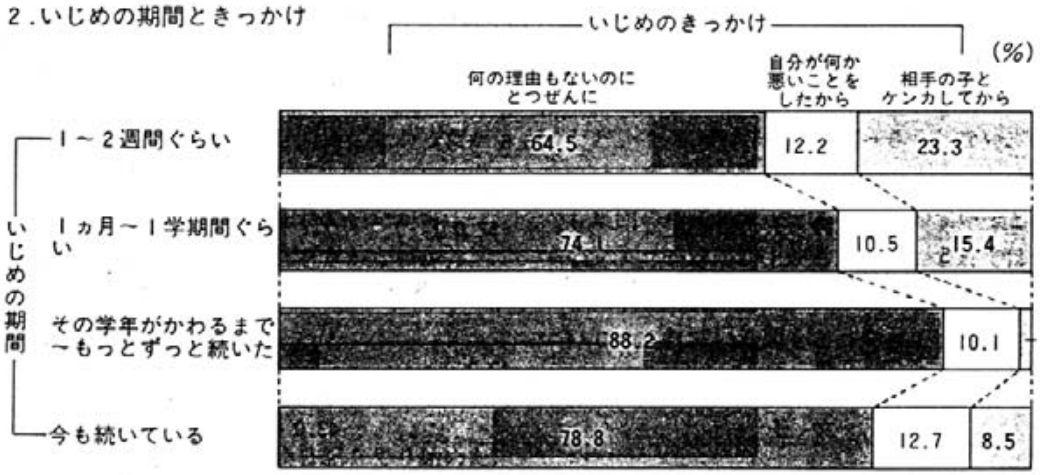


図12・いじめの期間×いじめっ子・きっかけ



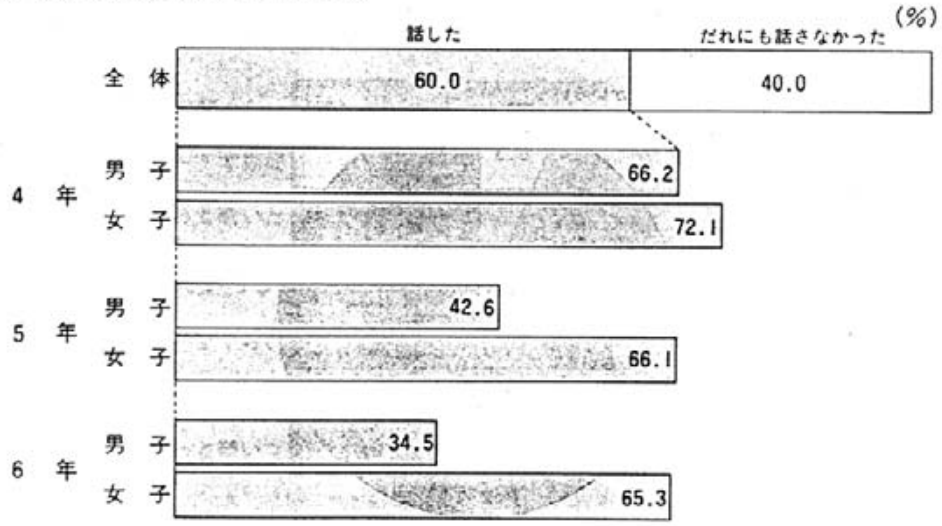


いじめられた時にどうしたか

まず、図13に示したように、いじめられていることを誰かにうち明けたかどうかについては、60%が「話した」と答えている。が、学年、性別をみると、女子は「うち明けた」がほぼ3分の2と変化はないが、男子は学年が上がるにつれ、66%、43%、35%といじめ

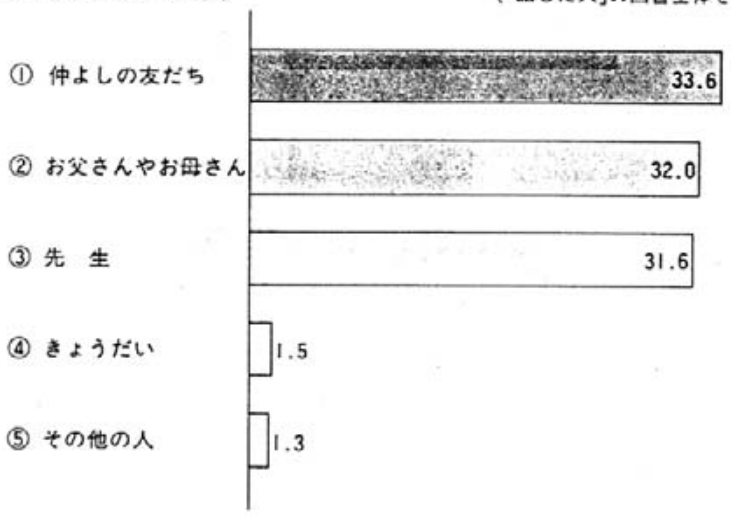
図13・いじめについての対策

1.いじめられていることを話したか



2.いじめを知らせた人

(「話した人」の回答全体を100%とすると)

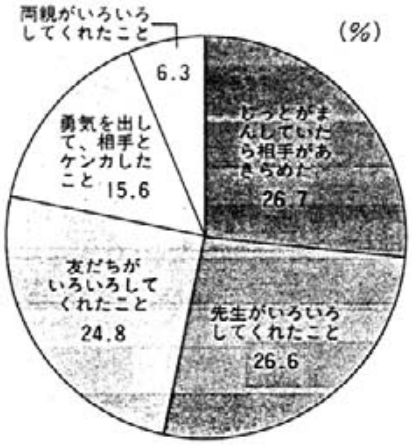


られていることを誰にもうち明けなくなる。

また、「話した」と答えた子どもたちがトップにあげた相手は、「仲よしの友だち」、ついで「お父さんやお母さん」、「先生」といった身近な大人である。果たしてそれらの人びとは、子どもを「いじめ」から救うことができただろうか。それともせめて、生き地獄とでも形容されるかもしれない状況の下で、子どもの心の支えになってやったのだろうか。

この点に関連するデータが、図14である。いじめにききめのあった対策として子どもが挙げているのは、①自分がじっとがまんしていたら、相手があきらめた27%、④勇気を出して相手とたたかった、が16%で、合わせる

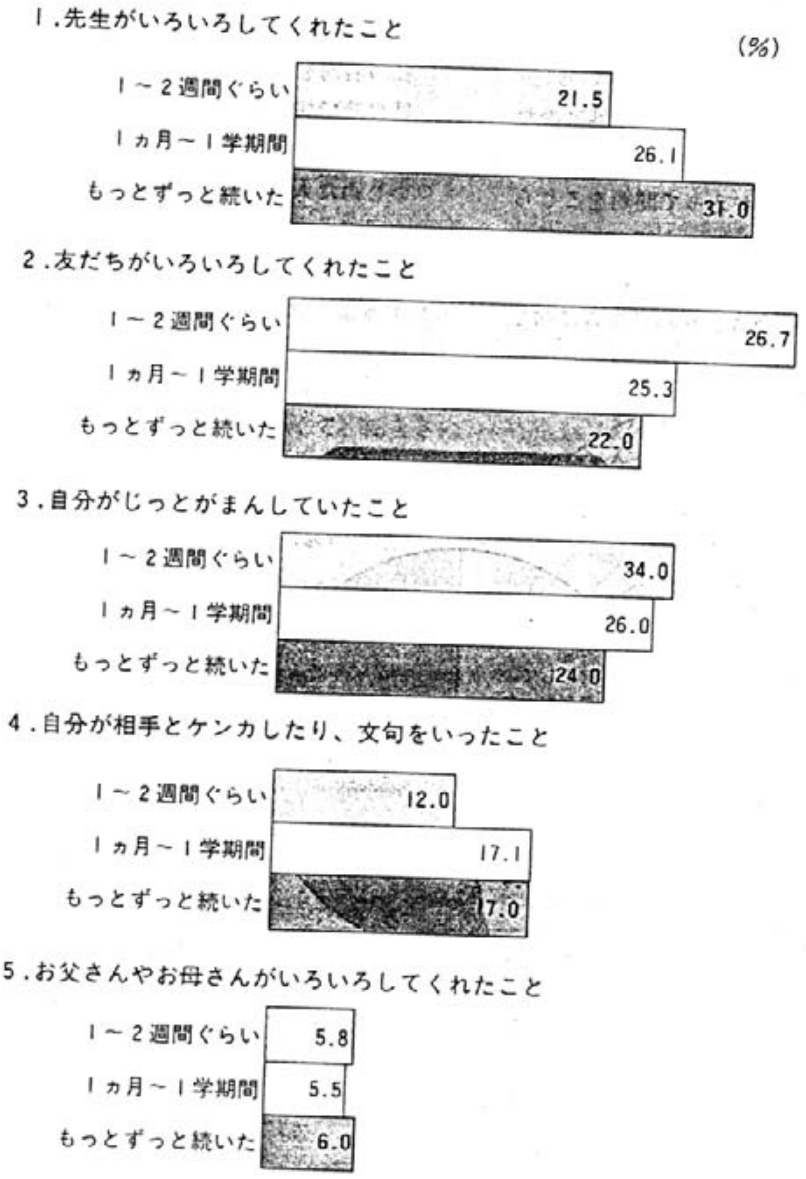
図14・ききめのあった対策



と、自分の努力によるものが43%。逆に②先生がいろいろしてくれた27%、③友だちがしてくれた25%と、相手の援助によるものが52%という結果になっている。

また、面白いのはいじめの続いた期間と、対応策との関連で、図15に掲げたように、いじめが長期化した時は、教師の援助が有効であり、逆に、自分がガマンしたり、友人が援助してくれて解決したのは、短い期間のいじめであるらしいこともわかる。いずれにせよ、父母が直接解決に役立つことは少ないようだし、自分が勇気を出すのも、むずかしいことのようである。

図15・いじめの期間といじめ解消の方法



教師の対応

いじめが長期化し深刻化した時に、最も大きな役割を果たせるのは教師であるらしいことは、図15からも浮かび上がってきた。しかし、現実にいじめが起こった時、教師はどう対応しているのだろう。

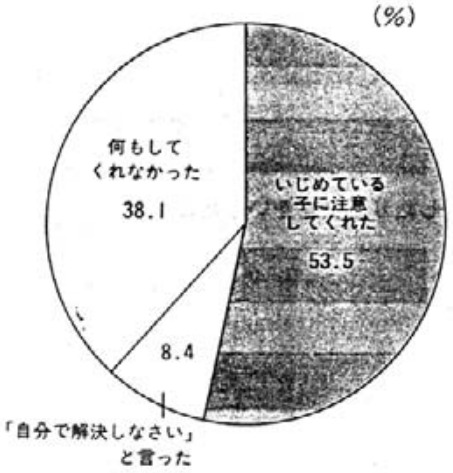
図16はまず大まかに、教師の対応を見たものだ。「いじめっ子に注意してくれた」54%。しかし他の46%は、何もしてくれなかったか、「自分で解決しなさい」とつき放している(少なくとも子どもたちの理解では)。意外に冷たい対応ではないか、という気もするが、中には、教師が中に入るとかえって問題をこじらしてしまうのではないかという観点で、子どもたちを見守ろうとした教師もいたかもしれない。しかしその場合は、せめて本人に対して精神的なサポートを与えるくらいのことは、しなければならなかったはずだが、果たしてどうだったのだろう。

ここで自由記述の中から、教師のとった具体的方法をひろいあげてみよう。

①いじめている側に対して

○その子を呼んできつく叱ってくれた
○いじめている子にいろいろ注意してくれた
○私の名前を出さずに、いじめている子を全員の前で注意した
○朝の会などでいじめないよう言ってくれた
○いじめた人の名をいわないで注意してくれた（アンケートをとった）
○私と相手の子を呼び出して、廊下で仲なおりするよう話をもっていってくれた

図16・先生の対応



○いじめている子のお母さんに話してくれたといったもので、直接的な注意、クラス全体に対する注意、親を通しての注意の三つの方向がとられている。

②いじめられている側に対して

○先生は私に嫌われない方法を教えてくれた
○いじめられていた子を集め、自分の悪いところを解決し、どうなったらよくなるか話し合いをした
○ケンカを最後までやらせた（先生の前で）
○「やはり自分で何とかしなさい。けれど、それでもできない時はどうかしてあげます」といった
○「自分がわがままや自分勝手でいばってばかりいるんだからしょうがないでしょ」といった

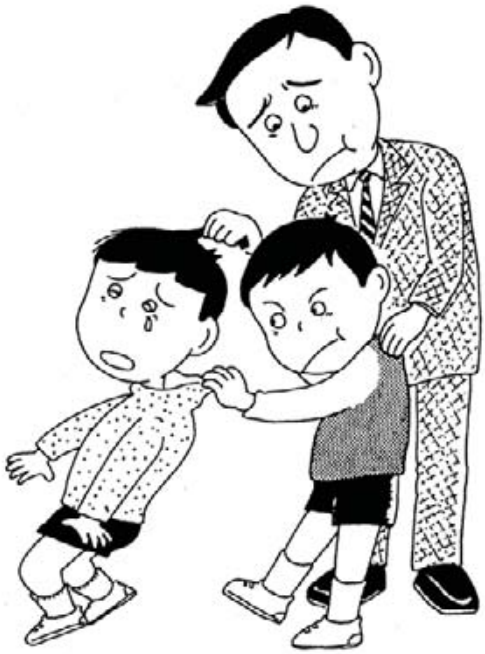
など、いじめの対象とされる要因を子ども自身に気づかせ、解決への努力をうながす方向が主である。

また、「先生は何もしてくれなかった」と教師の対応に不満をもつ子どもたちの声も聞いてみよう。

○その先生は何もしてくれなくて、話をきいてくれようとしなかった
○先生は誤解していた。だから何もしてくれなかった
○注意をしてくれた先生もいたが、反対に私をおこったり、何もせずに知らん顔をしていた先生もいた（小1からずっといじめられていた子）

のように、いじめられている子どもの言い分や状況を理解しようとしてくれなかったことを強調するものが多かった。

いずれにせよ、教師のベストの対応策は、一つひとつのケースにおいて、少しずつ違ってくるであろう。その意味で、画期的な策といえるものは、ないかもしれない。しかし、いずれのケースにおいても大切なのは、子ども自身が「先生は直接問題の解決に手をのばしてくれてはいないが、自分の気持ちや置かれている立場を誰よりもよくわかっていて、心配していてくれる。自分にがんばれと応援していてくれる」と感じていられるような存在として、子どものそばにいてやることだろう。



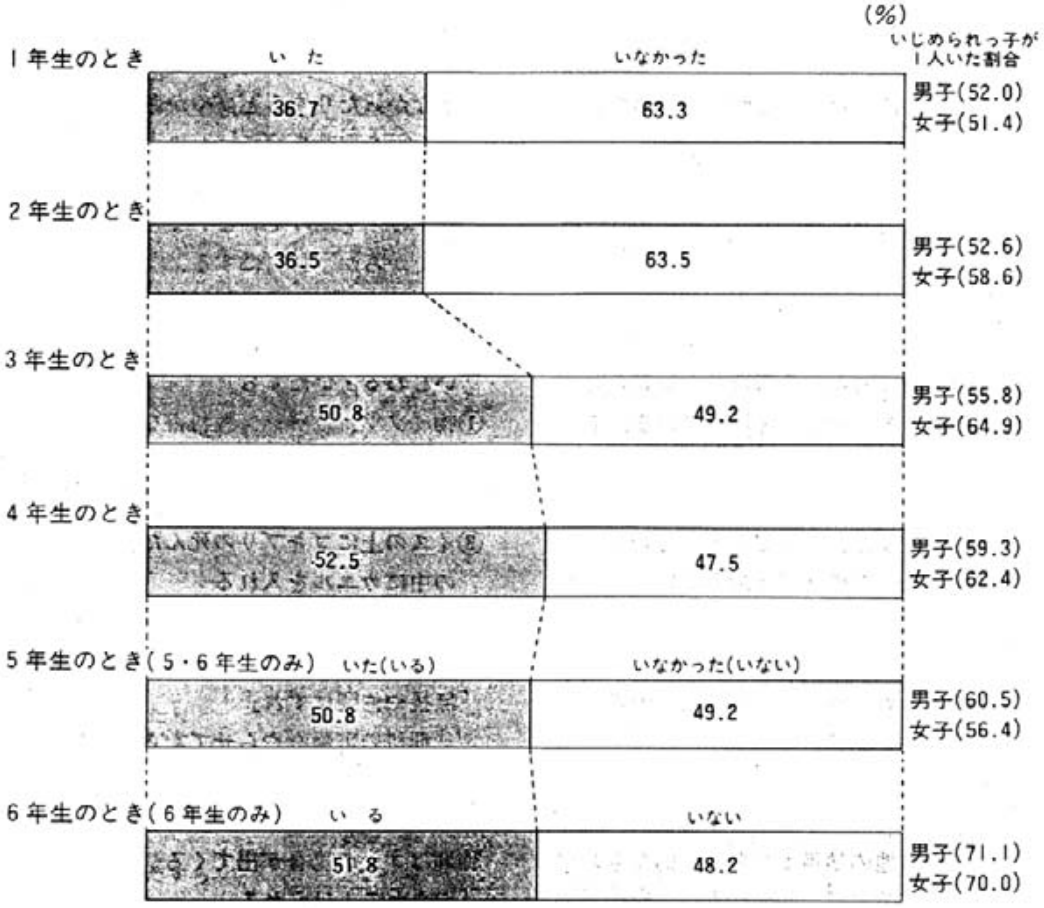
3. いじめられっ子はどのくらいいるか

以上現在のクラスのようすや子どもたち自身がもついじめられ体験を通して、いじめの問題に迫ってみた。「いじめ」は、受けとめるレベルに差があり、ちょっとした友人関係のトラブル程度のものから、1年生の時からほとんどずっと続いているという深刻ないじめまでさまざまなケースがあるようだ。

つぎに、子どもたちが今までにクラスの中にあったいじめについて、1年生のころから順に思い出してもらった結果を見てゆくことにしよう。

まず、図17に各学年ごとのクラス内でのいじめられっ子の有無をまとめた。1、2年生がともに37%、3年生以上が50%程度と、3年生段階でいじめの発生がひろがりをみせている。いじめの対象とされた子の人数については、巻末に示したように男女ほぼ同数で、各クラスにそれぞれ「1人」か「2人」という場合が多い。また、学年を追うにしたがって、いじめの対象がしだいに「1人」にしぼられていく傾向もうかがわれる。

図17・いじめられっ子


(%)
いじめられっ子が1人いた割合
1年生のとき
いた
いなかった
36.7
63.3
男子(52.0)
女子(51.4)
2年生のとき
36.5
63.5
男子(52.6)
女子(58.6)
3年生のとき
50.8
49.2
男子(55.8)
女子(64.9)
4年生のとき
52.5
47.5
男子(59.3)
女子(62.4)
5年生のとき(5・6年生のみ)
いた(いる)
いなかった(いない)
50.8
49.2
男子(60.5)
女子(56.4)
6年生のとき(6年生のみ)
いる
いない
51.8
48.2
男子(71.1)
女子(70.0)

1、2年生のいじめ

いじめの量は、1、2年生と3年生以上にややひらきがあった程度だが、いじめの質についてはどうだろう。低学年、中学年、高学年の三段階にわけ、いじめの発達的な差をデータと自由記述の内容を織りまぜながら比較してみた。

図18は、1、2年生のころのいじめについて、いじめた側の子どもといじめられ方とをたずねた結果である。項目は、前章のいじめられた体験と同一のものを用いている。1、2年生の段階では、いじめの発生率は37%であるが、いじめている子どもも「一部のグループの子」が多く、「ある1人の男の子」がという割合も、この学年が最も高い。大まかに、乱暴な男子や一部のいじめっ子たちが2～3人の子をつかまえていじめているという、いわゆるいじめっ子・いじめられっ子の関係があてはまりそうである。

いじめの内容については、図のように「悪口をいう、からかう」がほとんどのケースでみられるが、他の学年よりも暴力的なものがやや少なく、「無視や仲間はずれ」についてもまだ多くはない。自由記述の中にあらわれる具体的ないじめのようすは、次のようなものである。

「悪口やからかい」

①「走るのが遅くて、みんなに『のろま』と呼ばれていた」「給食のとき、いつも牛乳が飲めずバカにされていた」「とび箱ができなかったりするとひやかされた」など苦手な面を取りあげてばかにする

②「髪が少ない」「太っている」「背が低い」「メガネをかけている」など外見的なちがいをからかう材料にする

③「バーカ」「アーホ」と近くにきて言う

といった内容が主である。

「いじわる・いたずら」

①物（クツ、カバン、教科書など）をかくす

②教室の中に入れなかったり、トイレに無理やりとじこめる

③イスの上にゴキブリの死んだのを置く、机の中にカエルを入れる

④足をひっかける、髪をひっぱる、ぞうきんで顔をふく

「無視や仲間はずれ」

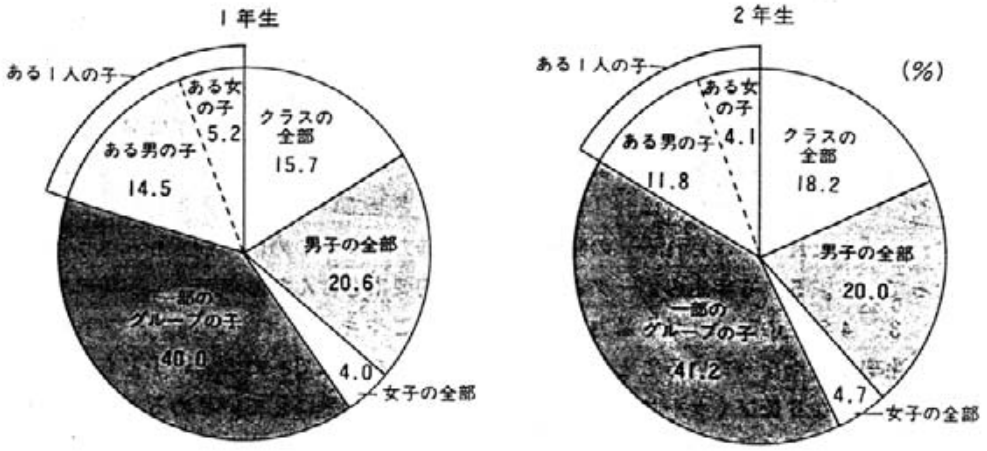
「理科の実験をやらせてもらえなかった」、「帰りにおいてきぼりにされた」、「鬼ごっこで鬼ばかりやらされた」といった一時的な仲間はずれの場合が出てくる。

「ぶたれる・けられる」

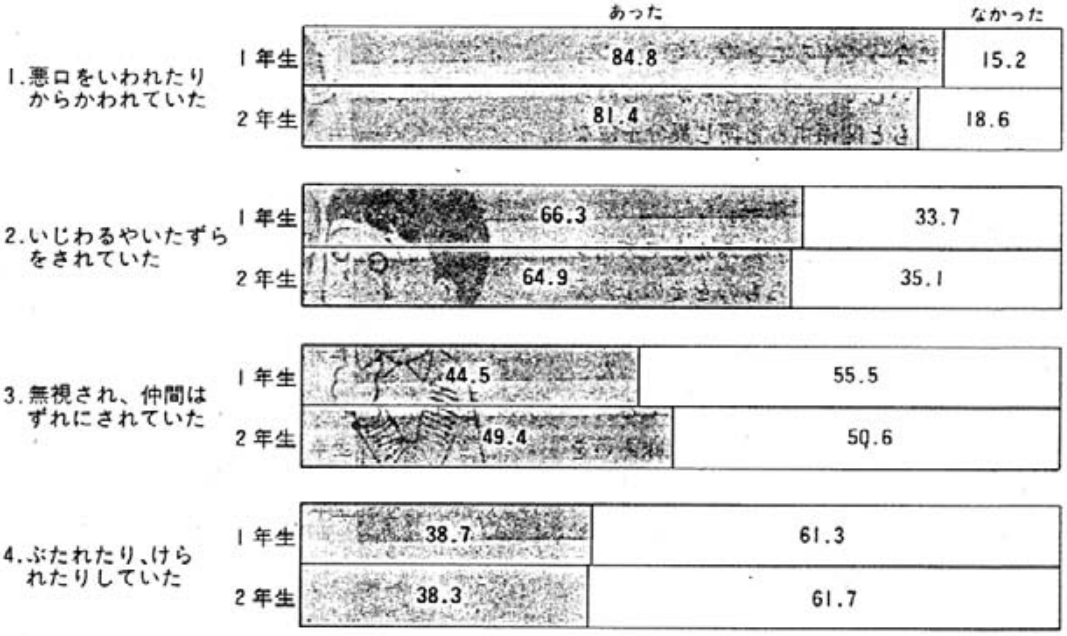
「ある子が大将みたいになってムシャクシャすると本でぶったりした」に代表されるような、力の強い、乱暴な子がカッとなって弱いものいじめをするようすが中心となっているようである。

図18・1、2年生のころのいじめ

① いじめていた子



② いじめられ方



3、4年生のいじめ

3、4年生になるといじめる側がより集団化する傾向がでてくる。図19の円グラフのように、クラスのほとんど全部の子どもがいじめにまわるケースが4分の1をこえるようになる。また、いじめの内容としては、「無視、仲間はずれ」「ぶたれる・けられる」の頻度が高くなっている。5、6年生のデータと比較しても、3、4年生の時期が最も暴力的ないじめの発生率が高くなっていることがわかる。期間的にもかなり長びくケースが出てくるが、特に3年生段階で発生したいじめが、クラスがえもないまま4年生までもちこされるという場合が多いらしいことも、子どもたちの声の中にみられる。

この段階で特徴的ないじめの内容としては、1、2年生のころよりも悪口やからかいの表現がシビアになってくることや、「○○キン」とバイキン扱いして、他の子どもがいじめられている子どもと関係すると同じ異分子になるぞという意味あいを強調する「集団いじめ」が登場してくる点がまず第一。

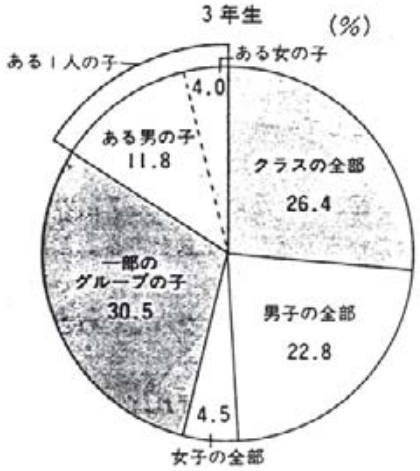
「いじわる、いたずら」も、みんなでズボンを脱がせたり、給食のもちものをその子の分だけ残したり、帰りの会で先生がいないといいがかりをつけてつるしあげたりといった、子ども世界のリンチ的な内容が出てくる。

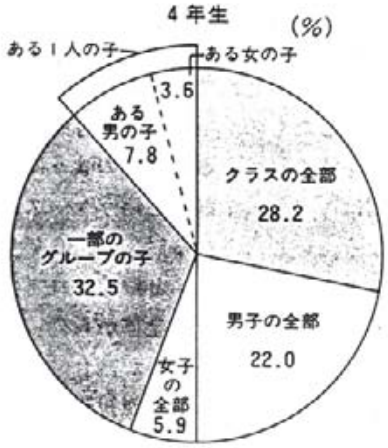
「無視や仲間はずれ」も同様の意味あいを強め、その子どもが近づこうとすると大騒ぎをして逃げたり、あからさまに「気持ち悪い、あっちにいけ」と排斥される。その子どもをスケープ・ゴートにすることで、他の子どもがいじめの危機感をもたずに何とかやっていけるといった集団心理が、いじめをエスカレートさせているようである。

暴力的ないじめについても、こうしたリンチ的要素を含んだものが多く、特にプロレスごっこやキックボクシング、空手といった格闘技をまねて、力の弱い子どもを実験材料のように相手にしていじめるというケースがいくつもあった。

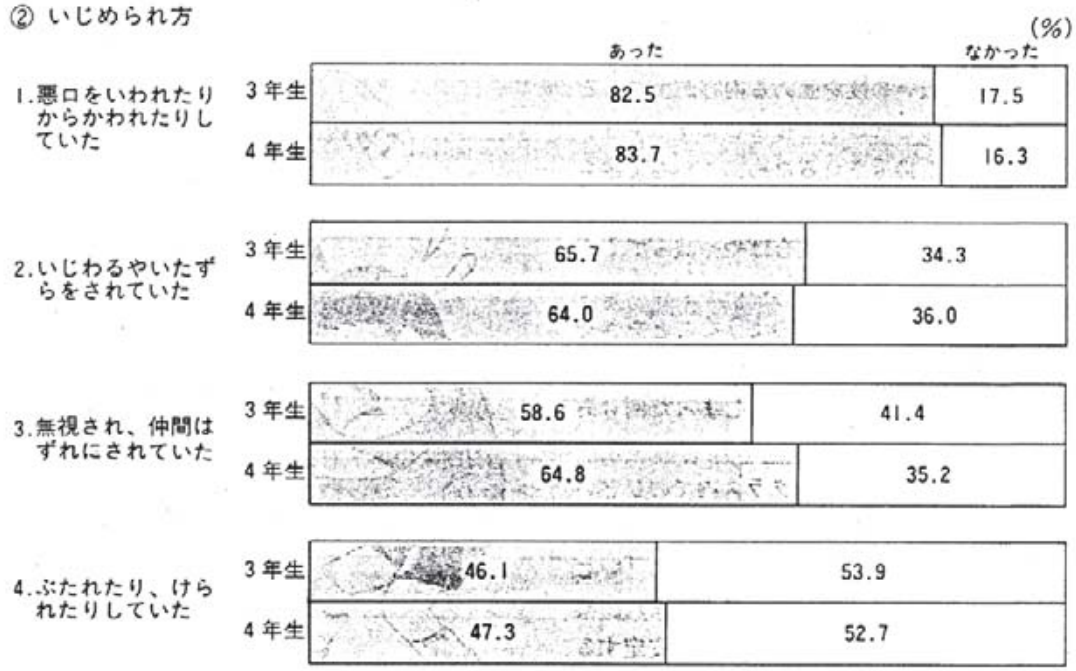
図19・3、4年生のころのいじめ

① いじめていた子





② いじめられ方



③ 期　間

5、6年生のいじめ

5、6年生のいじめでは、さらにクラス単位の集団化したものが増加し、内容的にも陰湿な様相を濃くしてくる。図20のように、いじめる側は「クラス全部」というケースがトップになる。いじめられる対象は、6年生では70%のケースが「1人」と限定されていた（図17）から、クラス集団全体からのいじめを一手にうける深刻ないじめが割合的に高いことになる。いじめの内容も無視や仲間はずれの頻度が高くなり、いじめの期間も長期化する傾向である。

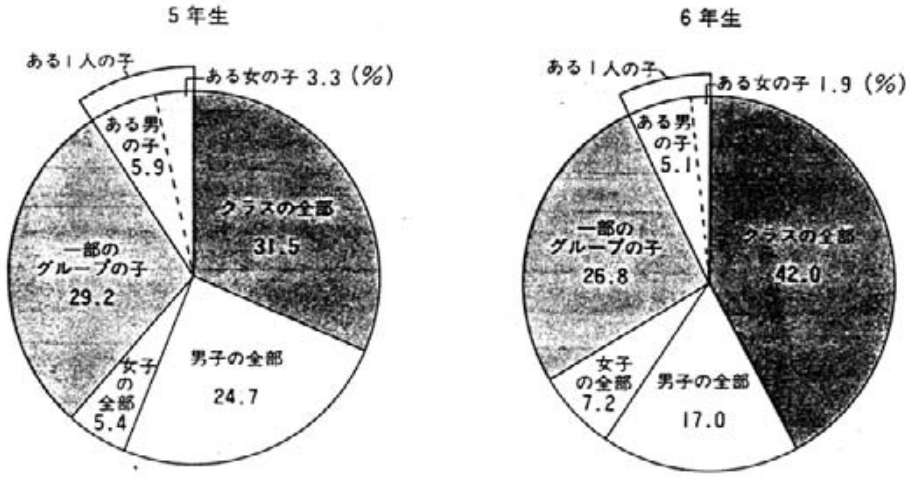
やはり「○○キン」といってその子を孤立させる例が非常に多く、その子の使用したものを大げさに避けたり、歌まで作って騒いだりと異分子扱いの度を強める内容が主である。また、いじめられっ子と接触しようとする子どもが、すぐ排斥されるため、こわくて誰も手が出せない状況がいっそうはっきりしてくる。暴力的ないじめの割合はやや減ってくるが、放課後など残って1人のボスが命令して他の子どもたちにリンチのようなことをさせたというケースもあり、集団いじめにあって、とうとう学校に来なくなってしまった例もあるという。

こうしてみてくると、クラス内でのひどいいじめは、1、2年生のころには「他の子の間のでき事」だったものが、しだいに「いじめられるか、いじめるか」に巻き込まれ、集団が1人のいじめられっ子の存在で安定する、といった状況が生じるようになる。1人の子どもをクラス全体でいじめていながら、何となくそれぞれの子どもが加害者意識をもっていない口ぶりであるのも、今日的な特徴といえそうだ。

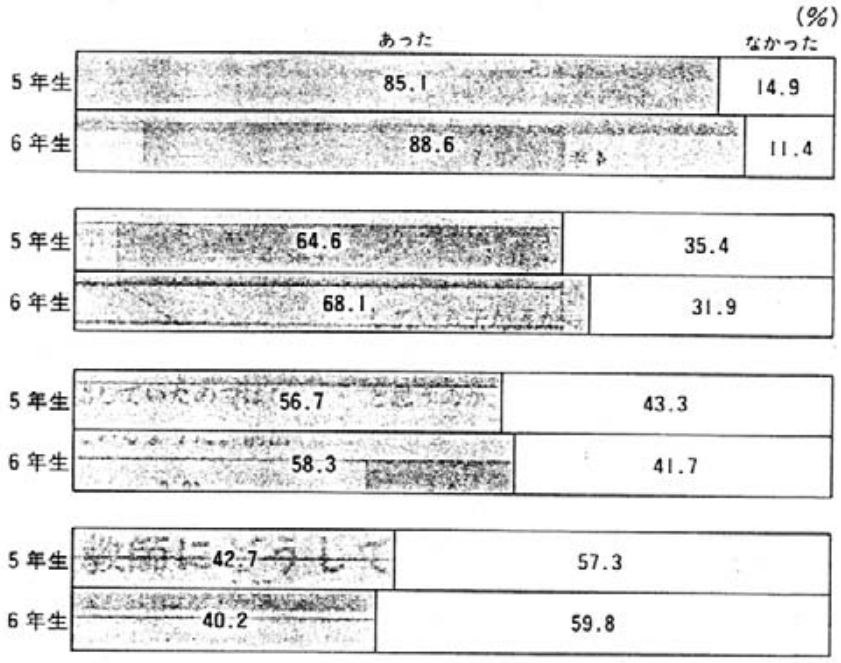
子どもたちに、クラスの中で長いことつらい思いをしている「いじめられっ子」がいるとき、その子どもにどうしてあげるかたずねると、図21のように6割から7割の子が「いじめている子どもに注意をする」と答えているし、5割から6割の子どもが「いじめられそうになったら味方になってやめさせる」だろうと答えている。しかし、実際には、高学年になるほど「やらなければ、自分がやられる側になる」といういじめの状況がひろがっており、子どもたちの意識と現実にいじめに出会った時の行動とのギャップの大きさが広がっていく。

図20・5、6年生のいじめ

① いじめていた(る)子



② いじめられ方



③ 期　間

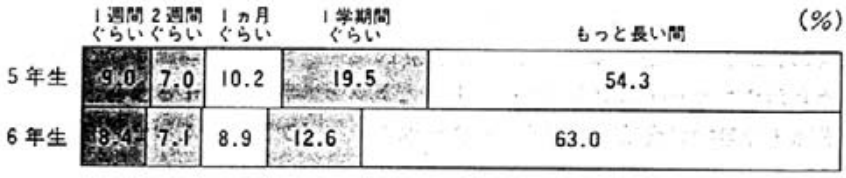
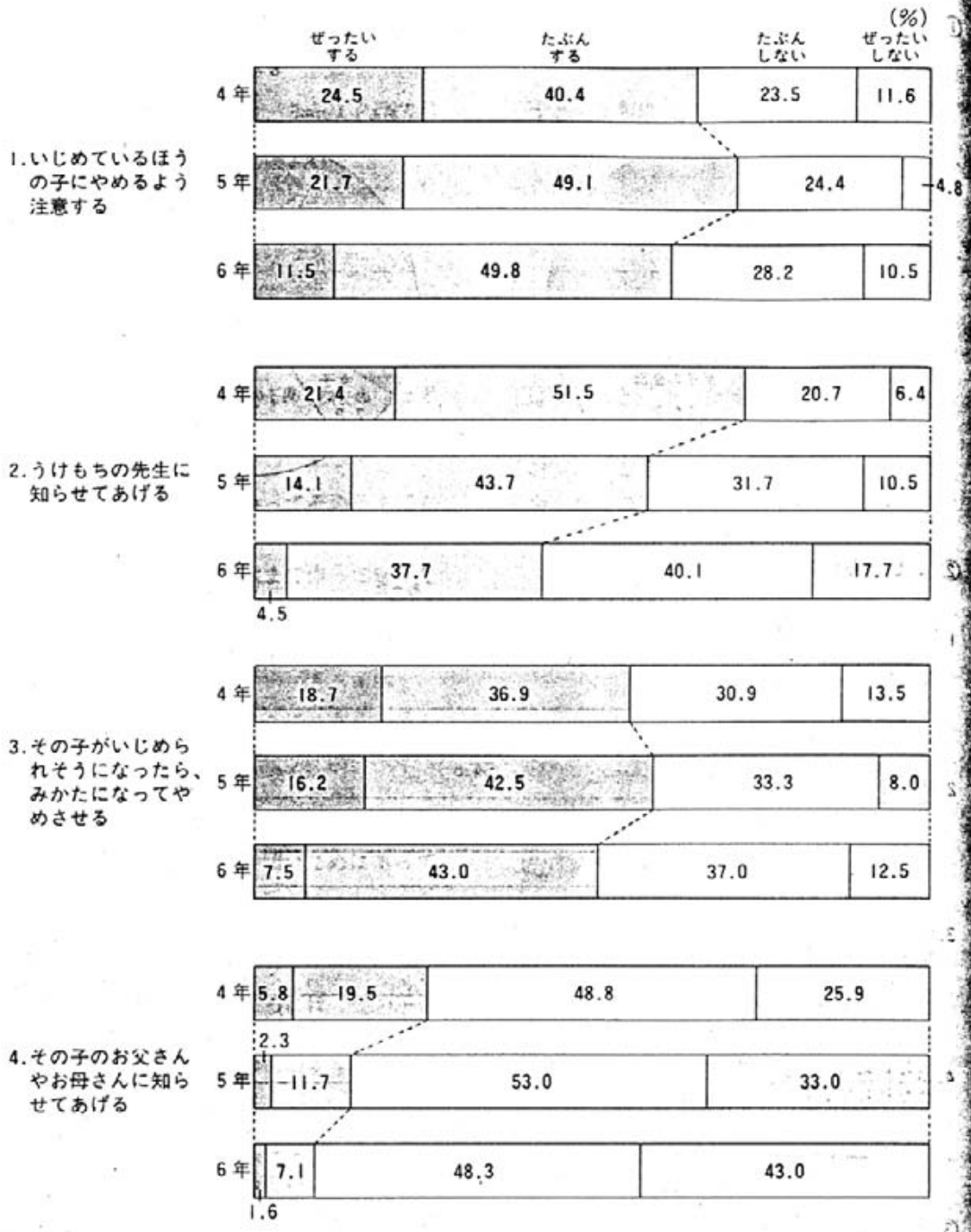



図21・あなたはいじめられている子にどうしてあげるか